

## 学術情報

## 第16回東京女子医科大学神経懇話会

日 時：1998年7月27日（月）17：00より

場 所：東京女子医科大学 第二臨床講堂

## 一般演題

司会 三谷昌平（第二生理）

## 1. 内側側頭葉てんかんの1学童例

(小児科) 木内真優・佐々木香織・伊藤知賀子・小峰 聡・  
平野幸子・中野和俊・小国弘量・大澤真木子

## 2. MRI上、限局性の腫脹を示した多発性硬化症の2例

(第二病院放射線科・\*同内科) 木村伸俊・小野由子・岩井恵理子・飯塚昌子・  
西村芳子\*・安 佐里\*・藤井千恵子\*・大川真一郎\*

## 3. 経咽頭脊髄刺激腰髄膨大部記録の下行性誘発脊髄電位の検討

(整形外科・\*第一生理) 山本直也・大武修一郎・中塚栄二・鈴木泰之・  
盛田 幹・伊藤達雄・川上順子\*

## 4. L-DOPAによる神経細胞株(PC12)の細胞死における細胞内活性酸素の役割

(神経内科) 橋本しをり・岩田 誠

## 特別講演

司会 宮崎俊一（第二生理）

代謝型グルタミン酸受容体機能の分子レベルでの研究の新展開

(東京都神経科学総合研究所神経生理学研究部門 副参事研究員) 久保 義弘

当番世話人：(東京女子医科大学第二生理) 宮崎俊一

当番幹事：(東京女子医科大学第二生理) 三谷昌平

共 催：東京女子医科大学神経懇話会・エーザイ(株)

## 1. 内側側頭葉てんかんの1学童例

(小児科) 木内真優・佐々木香織・  
伊藤知賀子・小峰 聡・平野幸子・  
中野和俊・小国弘量・大澤真木子

症例は11歳4カ月男児。主訴は恐怖感を伴う意識消失発作である。2歳6カ月時に痙攣重積の既往があった。11歳1カ月時より恐怖感を伴う数秒間の意識消失発作が1日2~3回出現した。徐々に発作時間、回数が増加したため当科入院となった。血液、髄液、誘発検査、有機酸代謝スクリーニングはすべて正常であった。脳波検査で覚醒、睡眠とも左側頭底部および外側部にスパイクと多量の徐波を認め、発作時脳波でも同部位からのスパイクを認めた。画像上は頭部MRIフレアール法で左海馬領域に腫瘍像を認めSPECTで左側頭領域の血流低下を認めた。以上より臨床経過は典型的MTLE症候群に合致したが、頭部MRIでMTLE症候

群に特有の海馬の萎縮像でなく腫瘍像を認めた点が合致しなかった。この理由として①MTLE症候群に途中から腫瘍が発生した、②腫瘍が発作の原因であった、③萎縮と腫瘍の両方が存在していた。以上3通り考えられる。いずれにしても臨床所見からMTLE症候群と診断しても詳細なフレアール、コロナールを含むMRI検査が必要であると考えられた。

## 2. MRI上、限局性の腫脹を示した多発性硬化症の2例

(第二病院放射線科、同内科\*)

木村伸俊・小野由子・岩井恵理子・  
飯塚昌子・西村芳子\*・安 佐里\*・  
藤井千恵子\*・大川真一郎\*

多発性硬化症(MS)はMRIで、視覚的に診断される例が多くなったが、他の多くの病変と同様に限局性のT2延長を示すため、画像上確定診断を得るのは困